都留文科大学大学院紀要　第22集（2018年３月）
THE TSURU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL REVIEW,
No.22（March, 2018）

〈報告書：大学院海外研修奨励制度／
Reports: Graduate School Global Education Program〉

John Hamamuraとハワイの日系コミュニティ
―ハワイ調査研修報告―

John Hamamura and the Japanese-American Community in Hawaii:
A Research Report

早川真理子
Mariko HAYAKAWA

はじめに

日本人のハワイへの移民は 1868 年に開始された。1885 年に官約移民が始まると、当時の日本の農村不況が背景となり、多くの日本人がプランテーションの働き手としてハワイへと押し寄せた[1]。そして 1924 年にアメリカへの移民が禁止されるまでには約 20 万人もの日本人がハワイへと渡っていった[2]。当時の日本人は、ハワイは「唐天竺のような所と聞かされ」ていた者が多かったのだが[3]、現実はプランテーションの中で、不当な労働条件の中働かされたり、日系人への人種差別、世代間の確執、写真花嫁として生きていく等の厳しい生活に辛抱する日々であったという。その中で日本人移民たちは次第にハワイに根を下ろし、その地で日系コミュニティの基盤を作っていった。2000 年の人口調査によると、ハワイはカリフォルニアに続いて二番目に日系人人口の多い州であるが、ハワイの中に焦点を当てると、日系人のルーツを持つ人口が 24.5% と最も多い[4]。そのため現在でも日系コミュニティがあらゆる活動をしており、世代が変わっても日本の伝統が人々に受け継がれている。

このハワイの日系人の体験を書いた日系アメリカ人作家に John Hamamura がいる。Hamamura は、第二次世界大戦の終戦を迎えた 1945 年に、ミネソタ州アメリカ軍内の病院で日系二世の両親のもとに生まれた日系三世である[5]。彼の両親は二人とも第二次

1　植木照代「日系アメリカ人の歴史と文学」『日系アメリカ文学－三世代の軌跡を読む』植木照代、ゲイル・K・佐藤編著（創元社、1997）、p.vi。
2　中鉢奈津子　「ハワイ日系人社会の特徴」(『外務省調査月報 2007 年度』(4)、2008)、p.30。
3　植木、p.vi。
4　中鉢、p.34。
5　Fancher, Lou. “Lafayette: ‘Literary Feast’ Features Stories of those Who Tell the Stories” in *Oakland Tribune.* Nov. 1 2012. *ProQuest.* Web. 23 Dec. 2017.

世界大戦を生き抜いた人物であり、彼が生まれた当時彼の母親と母方の家族は、アーカンソー州南部に建てられたローワー（Rohwer）収容所内で生活を送っていた[6]。そして父親は、ミネソタ州のキャンプ・サベイジ（Camp Savage）とスネリング砦（Fort Snelling）でアメリカ陸軍情報部の日本語教師をしていたため、家族とは離れて暮らしていた。その父方の祖母と伯母は広島に住んでいたのだが、幸いにも原子爆弾から逃れ生き延び、この親戚らの手助けをするために、戦後、彼の父親はアメリカ軍に再度志願し一家は日本へと移り住んだ。そのため Hamamura は少年時代を東京郊外に建てられたグランドハイツと呼ばれるアメリカ軍基地内で暮らし、夏休みになるとグラウンド・ゼロから 2.5 マイル (約 4 キロメートル) ほど離れた祖母の家で過ごしながら成長していった。しかし彼は日本の中でも、とりわけアメリカ軍基地内で暮らしていたため、基地内と外との間に隔たるフェンスを通して外の日本人を見ながら、自分と彼らとの違いを感じ取っていた。フェンスの外の人々と自分は同じ日本人の姿で、日本語を話す。しかし、外の日本人、また祖母や伯母とも、アメリカ生まれの自分はどこかが違い、「なぜ自分はアメリカ人なのだろうかと考えながら」過ごしていたという[7]。

一家はその後、アメリカのカリフォルニア、ローダイ（Lodi）という町へと戻ってくる。この町は Hamamura の著書 *Color of the Sea*（2006）の中にも登場し、主人公が成人期を過ごす重要な場所として描かれる。だがアメリカに戻った Hamamura は、ここでもまた日本にいた時と同じような自身の居場所の無さを感じ、この場所にも、見えないフェンスが挟まっているような思いを抱く[8]。このような、幼少期に日本に移り住み日本で教育を受けた後にアメリカに戻った Hamamura は、日本とアメリカの間で揺れ動く自身のアイデンティティに関する苦悩を感じ過ごしてきたのである。

Hamamura は彼の著書を彼が 61 歳の時に出版した。この物語の舞台は 1930 年、40 年代であることから、戦時中の人々の暮らしが繊細に描かれている。しかし彼が若かりし時には、戦争を直に経験した親世代の人々は当時の経験を決して彼に語ることはせず、Hamamura 自身が大人になり質問や調査を始めるまで、その沈黙が破られることはなかった[9]。だが 1990 年代、Hamamura が真剣にその歴史を調べようとする姿を彼の父親が目撃したことがきっかけとなり、彼と父親は、父親が亡くなる 1998 年までの間、地図や昔の写真を探し出し、父親の生まれた場所であるハワイのサトウキビプランテーションや戦後赴いた広島などの現場を実際に訪れることによって父親の歴史を共に遡り、沈黙された親世代の経験を明らかにしていった[10]。そして、彼が父親の経験をもとに生み出したのが「家族史」とも言える著書 *Color of the Sea* であり、2007 年にアメリカ図書館協会が主催するアレックス賞を受賞した。彼自身、彼のウェブサイトの中で「その歴史が自分を創ったのだ」と述べているように[11]、この親世代の歴史を解明し、理解

6 “Sansei Legacy Project: Meet Authors John Hamumura and Shizue Seigel.” in *Discover Nikkei.* 20 May. 2006. <http://www.discovernikkei.org/en/events/2006/05/20/871/> Web. 23 Dec. 2017.

7 Fancher

8 Ibid.

9 “John Hamamura” <http://www.johnhamamura.com/> Web. 23 Dec. 2017.

10 Don Mayhew The, Fresno B. “Self-Identity, War Fill ‘Color of the Sea’ ; INFOBOX.” in *The Fresno Bee:* E1. Nov. 2 2006. *ProQuest.* Web. 23 Dec. 2017.

11 “John Hamamura” 参照。

したことは、彼がアイデンティティを形作る上で重要な部分となったと考えられる。

このような Hamamura と父親の苦労の末に生み出された *Color of the Sea* の中には、彼の父親が暮らしていたであろうハワイの日系コミュニティが描かれており、その中で主人公は自身のアイデンティティを模索しながら成長していく。今回の調査研修では、ハワイの日系人の歴史と現在の日系コミュニティを探索することを目的とし、Hamamura の作品をより深く理解するために East-West Center、ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ、ハワイ日本文化センターを訪問した。

1. East-West Center

East-West Center は、ハワイ大学マノア校と隣接しており、東洋と西洋の中心に位置するハワイで、アメリカ、アジア、太平洋間の関係と相互理解を深めるための役割を担う機関である。このセンターは 1960 年のアメリカ合衆国議会により国民教育機関として設立され、様々な情報や資料、人々が意見交換をする場を提供するために、アメリカ政府等の財政援助により組織され、50 年以上存続している機関である[12]。センターでは、様々な展示やイベント、セミナーなどが行われており、公共に開かれている。今回訪れた時には、“Yangon Echoes － inside heritage homes” というタイトルで、ミャンマーの首都、ヤンゴンに関する展示が開催されていた。内容としては、今日急速に進むグローバル化に直面し、それに対応していかなくてはならないヤンゴンに住む人々に与えられる圧力や、ヤンゴンの伝統が消えていくことへの恐れが、オーラルヒストリーとして紹介されていた。また、現地で暮らす人々のアイデンティティの葛藤から、グローバル化が進むにあたり、伝統的な建物からコンクリートの新しいアパートメントへと移り変わっていくことへの一種のあきらめのような気持ちまで、様々な人々の感情が訴えかけられていた。[図１]

［図1］East-West Center で常時開催される様々なプログラム

このヤンゴンに関する展示のように、センターでは様々な国の議題がハワイからの視点で発表、議論されており、ここからアジアやアメリカ本土へ問題提起が発信されている。またハワイは多民族が暮らす州であるため、このセンターの中にも日本庭園やタイのパビリオンが建てられているなど、それぞれの民族のアイデンティティが主張されながらも、互いの文化を尊敬し共存し合っているような雰囲気が醸し出されている。また常時公開セミナーも行われており、今回は、東洋大学教授、East-West Center 客員

12 “East-West Center” <https://www.eastwestcenter.org/> Web. 23 Dec. 2017.

研究員を務める水野剛也先生の “The ‘Enemy Language’ Press under Martial Law: Military Control of Japanese Newspapers in Wartime Hawai’i” という第二次世界大戦時に置かれた日本語新聞に関するセミナーが開催された。

ハワイで当時最も有力であり、日本人労働者の中で読者を得ていた二種類の日本語新聞は日布時事と布哇報知であった。日布時事は、この名称で発行されたのは 1906 年から 1942 年までであり、1942 年からは *Hawaii Times* として刊行されたが 1985 年に発行終了となった[13]。そして布哇報知は、1912 年に創刊され、「ジャーナリズムによる社会運動を在ハワイ日本人コミュニティにもたらした」新聞であり、今日、ハワイで唯一続いている日本語新聞である[14]。水野教授によると、第二次世界大戦中、両新聞社に勤める何人ものジャーナリストが FBI により、敵性言語で書かれた新聞を発行する人物として連行されたため、発行を中止せざるをえなくなった時期があったようだ[15]。特に日布時事では、120 人の記者のうち 30 人もが逮捕された。そして 1941 年 12 月 10 日には、発行を中止する命令も下されたため、情報が閉ざされた日系人たちは間違ったうわさを信じてしまったり、東京からの偏ったニュースをうのみにしていたのである。1942 年になると突然、日布時事と布哇報知を再開するよう命令が下された。それは、アメリカ側がこの日本語新聞を発行することで、日系人らのアメリカ化を図るのに有効だと判断したからであった。両新聞社は発行再開したものの、それはまず英語で執筆し、それを一語一語日本語に翻訳するという方法がとられており、書かれた英語は全てアメリカ側に検閲をされたため、戦前のような自由な発行とは程遠いものであった。そして “Jap” や “enemy” などの言葉を強制的に使用させられ、天皇は侮辱する対象として書かれていたのである。

Hamamura の *Color of the Sea* の中にも、新聞ではないものの、日本側が制作したプロパガンダが登場しており、当時の日本人の考えを強制的に操るよう仕向けられたものがあったことが描かれている。このセミナーでは、戦時中のマスメディアは戦前とかけ離れた、非常に偏った情報を流さざるを得なかった状況に置かれていたことが伝えられていた。アメリカ政府により、人々を支配するマスメディアへと強制的に変えられていたのである。このセミナーを通し、政治的に操作されたマスメディアに翻弄された被害者である日系市民の苦悩を考えさせられた。

2. ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ

ハワイ・プランテーション・ヴィレッジはワイパフ地区にあり、1990 年代初期のハワイサトウキビプランテーションの歴史を学ぶことの出来る屋外博物館である[16]。当時

---

13 “Nippu Jiji” *Hoji Shinbun Digital Collection.* Hoover Institution Archives. Web. 23 Dec. 2017.

14 “Hawaii Hōchi” *Hoji Shinbun Digital Collection.* Hoover Institution Archives. Web. 23 Dec. 2017.

15 Mizuno, Takeya. “The ‘Enemy Language’ Press under Martial Law: Military Control of Japanese Newspapers in Wartime Hawai’i.” East-West Center, Hawaii. 27 Mar 2017. Lecture.
戦時中の日本語新聞の状況については、水野剛也先生のセミナーの内容と配布資料を参照した。

16 “Hawaii’s Plantation Village” <http://www.hawaiiplantationvillage.org/> Web. 23 Dec. 2017.

ハワイのプランテーションには、ハワイアンや日本人以外にも、中国人、フィリピン人、韓国人、ポルトガル人、プエルトリコ人など様々な民族が異なる国から働きに来ていた。そして、マネージャーからの圧力や人種差別が存在したプランテーションの地で、日本人ら労働者は、少ない賃金で「一日 10 時間から 12 時間の炎天下での重労働」をさせられるなど、身体的にも精神的にも辛い労働に携わった[17]。このプランテーション・ヴィレッジでは、そのような移民たちが暮らした家や店などの建物が修復・復元され、展示されており、実際に家の中へ入ることも出来る。そこには、当時の生活がそのまま残されているかのように家の内部が細かく再現されており、日本人の家には将棋や神棚が置かれていたり、韓国人の家にはチマチョゴリがかけられているなど、それぞれの民族独自の伝統を大切にしながら過ごしてきた移民たちの様子を知ることができた。[図 2]

［図2］ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ内に建てられた神社

この施設の見学は個人でも可能だが、施設のスタッフによるツアーもあり、彼らの語りを通して当時の歴史と生活様式をより詳しく学ぶことができる。スタッフはプランテーションを良い状態で保存するために日々敷地内の手入れを怠らないのと同時に、プランテーション時代の歴史についての知識がとても豊富である。今回のツアーでは、ハワイでは、日本人と沖縄人とでは今も昔も異なる伝統文化を保持していることや、プランテーション時代にはハワイにポルトガル人がいたにも関わらず、今ハワイにはポルトガルレストランが少ないことに疑問を抱いているなど、スタッフの方々の意見や経験を織り交ぜながら説明をしてくれたため、今と昔両方のハワイの姿を思い浮かべながら見学することができた。

また、様々な国の人々のハワイに対する思いを伺うことが出来るのも、このツアーに参加をする利点である。例えばカリフォルニア・サクラメントから来ていた一組の三世代の家族は、おばあさんはハワイ生まれであるということでとても懐かしそうに建物を見て回っており、サクラメント生まれであるその娘さんやお孫さんは、おばあさんの生まれたハワイでの歴史に真剣に耳を傾け、家族にまつわる歴史が次世代に受け継がれているようであった。Hamamura もこのようなプランテーションへ父親と訪れ、歴史と共に父親の当時の生活を目の当たりにした。そして *Color of the Sea* の中でハワイのプランテーションという場所を、主人公がアイデンティティの土台を築く最も重要な場所として描いたのである。

17 植木、p.vi。

3. ハワイ日本文化センター

ハワイ日本文化センターはハワイ大学付近に設立されており、日系アメリカ人の辿ってきた経験を次世代に伝え、ハワイの中にある多様なコミュニティをより強固にしていくために1987年に正式に設立された機関である[18]。このセンターの中には、日系人の歴史と伝統文化を学ぶことの出来る、あらゆる施設が整っており、空手を学べる道場や、茶道や書道のための茶室などが完備され、クラスは市民に開放されているため、子どもから大人まで、どの世代の人も参加することができる。[図3]

［図3］ハワイ日本文化センターの外観

センターの中には、“Okage Sama De: I am what I am because of you” というタイトルのヒストリカル・ギャラリーが展示されている。ここでは、装飾品やパネルなどを使い、日本人がハワイに渡った経緯から、プランテーションのホレホレの辛い労働、子ども達がアメリカの学校へ通うことでつくられていったアメリカへの愛国心などが伝えられており、第二次世界大戦が始まるとFBIに連行され、忠誠心を疑われながらも日系アメリカ人としてアメリカ市民であることを証明していった日系人の姿は映像としても見ることができる。このギャラリーからは、タイトルからも分かるように、このような経験をしてきた日系人の辛抱や努力、勇敢さによって今の日系人の暮らしがあるという昔のGannenmonoたちへの感謝と、次世代の日系コミュニティへの希望が伝わってくる。

ギャラリーの隣にあるHonouliuli Education Centerには、歴史から忘れ去られていたハワイの強制収容所、ホノウリウリ（Honouliuli）収容所が、1998年、人々の手によって発掘されたというリポートが掲示されていた。ハワイでは、1940年時点で全人口約42万7千人のうち日系人が約37%を占めていたという非常に日系人人口の多い社会構造であったため[19]、アメリカ西海岸のように、ほとんどの日系人が収容所に送られたということはない。しかしハワイでも、市民権の有無にかかわらず日系社会のリーダーは収容所へと入れられた。当時ハワイには合計で17か所の収容所が存在し、そこに収容された日系人はその後解放された者もいたが、合衆国移民局やサンドアイランド収容所に送られたり、その後にホノウリウリやアメリカ本土の強制収容所に送られた者もいた[20]。1943年になるとサンドアイランド収容所が閉鎖され、オアフ島西部に建てられたホノウリウリ収容所に抑留者たちは移された。ホノウリウリはハワイ最大の捕虜収容所

18 “Japanese Cultural Center of Hawai’i” <https://www.jcch.com/> Web. 23 Dec. 2017.
19 小川真知子 「太平洋戦争中のハワイにおける日系人強制収容：消された過去を追って」(『立命館言語文化研究』25(1)、2013)、pp.106-107。
20 ホノウリウリについては、Honouliuli Education Centerで配布していたホノウリウリ収容所の資料を参照した。

であり、日系人やヨーロッパ系抑留者たちの合計約 4000 人もの人々が収容されたのである。その場所は耐え難いほど暑く、社会から断絶された場所であったため「地獄谷」と呼ばれており、人々はこれまでにない苦痛を味わった。しかし 1946 年にホノウリウリが閉所されると、そこまで人々を苦しめていたにも関わらずこの収容所は人々の前から姿を消し、ジャングルと化した。そして 1998 年、地元のテレビ局からハワイ日本文化センターに問い合わせがあるまでホノウリウリは忘れ去られていたのである。そしてこの問い合わせをきっかけに、ボランティアたちは調査を始め、ついに 2002 年に収容所跡が発見され、2015 年には、バラク・オバマ大統領が、「たとえ非常時でも国民の自由を守ること、われわれの価値観を維持すること。その重要性を、ホノウリウリは全アメリカ国民に思い出させてくれるでしょう」とこの収容所跡地を国定史跡に指定することを宣言し、ホノウリウリは歴史の中に取り戻されたのである。

この収容所で実際に抑留されていた人々が、当時の経験を振り返ることもなく約 50 年間も沈黙を続けていた事実は、Hamamura の親世代が、彼に戦時中の体験を語らなかった事実を思い起こさせる。ホノウリウリ収容所のリポートに「ホノウリウリに抑留された人々の暮らしは、けっして以前と同じには戻りませんでした」と述べられているように、無罪の者たちが、日系人であるからという理由で収容所に入れられたことほど、人々を苦しめ、人生を狂わせられるような経験はなく、当事者が、沈黙をすることでこの経験を忘れようとしてきたのも無理はない。しかし、そのような不条理で矛盾に満ちた歴史が存在したことは、決して忘れてはならない事実なのである。今では戦争を直に経験した日系人の数は減少し、異人種間結婚が進むことで、人々の日系性は外見や言葉からも徐々に薄まってきている。しかし、今の日系人たちが自身のルーツに関心を持ち、歴史を大切にしているからこそ、今も日系人の伝統が受け継がれているのであり、忘れられていたホノウリウリの歴史が取り戻されたといえよう。

おわりに

今回、日系人の歴史と現在の日系コミュニティを調査し、John Hamamura の作品をより深く理解することを目的としてハワイを訪問した。ハワイに到着すると、道路沿いには日本名で書かれた看板や工場があり、所々に神社が見えるなど、日系のルーツを持つ人々が数多く暮らしていることが直に伝わって来た。また、日系一世から伝わったであろう日本の盆踊りや七五三などの伝統行事が受け継がれ今でも行われているように、East-West Center、ハワイ・プランテーション・ヴィレッジ、ハワイ日本文化センターらが中心となり、伝統や歴史を伝えるために活発に活動を行っていることが分かった。そして今年の 5 月、ハワイの「ホノルル国際空港」の名称が、ハワイで生まれ、第二次世界大戦時に日系アメリカ部隊の兵士として戦場へ赴き、その後アメリカ連邦上院議員に選出された日系アメリカ人ダニエル・イノウエの名称を取り「ダニエル・K・イノウエ国際空港」へと変わったことから、日系人の歴史はもはやハワイ全体の歴史として認識されているといえるだろう。この調査研修の中で、自身のルーツを調べていたり、歴史を伝えていこうとする数々の日系人に出会ったが、彼らの姿は、アイデンティティを模

索し、「家族史」とも言える *Color of the Sea* を書こうと思い立った Hamamura の姿と重なる部分がある。Hamamura も直接第二次世界大戦を経験したわけではないが、日系アメリカ人三世として、日系人の歴史を伝えていく使命感を持ち、彼の著書を執筆したのだと思われる。

Received:October 27, 2017
Revision received: November 28, 2017
Accepted:December 06, 2017